

# 歴史的な真空恐怖

—ブルーメンベルクの「哲学者の神の過剰」について

下 田 和 宣

## はじめに いくつかの「神の死」

生者にはない、死者特有の質についてしばしば指摘がなされる<sup>(1)</sup>。親しかった者が亡くなるということは、その死後の生を生きながら、その人物との交わりを記憶する残された者にとって、ときに生前よりもリアルな、強烈な意味を与えることもある。死がその者の実在性の冪を引き上げることは、死者を神として祀る文化にとっては、とりわけ馴染み深い現象だとも言えるかもしれない。

ヨーロッパの精神史を振り返ってみると、死者の神格化ではなく、神の死者化とでも言いたくなるような、「神が死ぬ」という思想にしばしば出くわす。真っ先に思い当たるのは、ニーチェによる「神の死」の宣言だろう。この言葉で表現される伝統的な神信仰に対する信用の喪失<sup>(2)</sup>は、ニーチェにとって、最高の諸価値の無価値化としてのいわゆるニヒリズムを準備するものである。その一方で、我々はまさに神信仰の表現としての（キリスト教的、ないしその哲学的再把握の一形態としてのヘーゲルの<sup>(3)</sup>な）「神の死」の語りについても知っている。ニーチェの「神の死」は、三位一体の神が持つ無限の力強さを示す事態としての「神の死」のパロディーであると言えるかもしれない。そのようなパロディーが口にされてしまうところでは、神の死復活を真面目に受け取ることはもはや不可能である。だとすれば、「神の死」のレトリックの変容過程にこそ、ニヒリズムという宗教哲学的な時代診断を説得力のあるものとして可能化している背景が認められるのではないだろうか。

ブルーメンベルク（Hans Blumenberg, 1920-1996）の後期著作『マタイ受難曲』（*Matthäuspasion*, 1988）の最終章である「哲学者の神の過剰」はまさに神概念に見込まれるいわば期待値の変遷に着眼点をもつ論考である<sup>(4)</sup>。そこ

で本稿では、このチャプターを分析することで神が死者として語られる事態の持つ意味について考察する。そこから同時に、「神の死」という修辞の目立たない推移を浮き上がらせる作業によって成立するような、ブルーメンベルク独自の哲学の射程もまた明らかとなるであろう。

以下ではいくつかの前置きを述べ(1.)た後で、ブルーメンベルク『マタイ受難曲』の最終章「哲学者の神の過剰」を分析していく。この最終章で問題とされるのは、ヨーロッパ精神史全体を覆う神概念の「エスカレーション」とその抑制という現象である(2.)。とくに重視されるのは、ニーチェの位置づけである。ここに「死んだ神を想起する」というモチーフが登場する(3. および4.)。ブルーメンベルクはそうした神観念の形成がどのような事情のもとで促されたかを明らかにしようとする(5.)。『マタイ受難曲』最終章の作業は全体としてどのような狙いを持つものであるか。最後にこのことを明確にするとともに、歴史的な「まわり道」をたどるブルーメンベルクの思索の哲学的な意義についても考えてみたい。

## 1. 背景・受容・迂回——ブルーメンベルクの思索圏と『マタイ受難曲』

### a. メタファー学から文化哲学的人間学へ

ブルーメンベルクはとりわけ日本では修辞学重視の思想史家として紹介され、これまで長くそのように読まれてきた。それだけに、宗教哲学的問題の考察にブルーメンベルクを参照することはどのような点で有効だろうか、という疑問の声が上がるかもしれない。それでもその思想発展史全体を視野に入れるなら、その諸著作が純然たる精神史記述に留まるものではなく、独自の哲学的問題意識に深く根差したものであることは理解できる。

比較的初期である 1960 年前後に定式化された「メタファー学 (Metaphorologie、隠喩学)」という思考の枠組みは、概念史研究の批判的補足として提起された経緯がありながら、歴史学的な記述に留まらない狙いをすでにして持つものであった。すなわち文学上の修辞技法に留まらず、哲学や科学の領域におけるメタファー使用の歴史をたどることで、「歴史的意味地平・視覚方式そのもののメタ運動論」(MP 16) という概念的思考の「背景 (Hintergrund)」を解明することがそこで目指されていたのである<sup>(5)</sup>。

1970 年代以降ではさらに、「生活世界」概念を軸にメタファー学の現象学的な捉え直しが試みられ、結果としてそれは「非概念性の理論 (Theorie der Unbegrifflichkeit)」と定式化されるに至る<sup>(6)</sup>。諸研究が指摘するように、その展開の背後にブルーメンベルクの「人間学」があった<sup>(7)</sup>。近年では遺稿を中心とした新資料の発見と検討により、ようやくその思考全体が明らかになりつつある<sup>(8)</sup>。

ブルーメンベルクの仕事の全体像を窺い知るためには、例えば 1981 年に公刊された『世界の読解可能性』(Die Lesbarkeit der Welt) の冒頭で表明される次のような「失望」を踏まえることが重要である。

「我々は何を知ろうと欲していたのか (Was wollten wir wissen?)」——それが、カント『純粹理性批判』以来 200 年の間で、「我々は何を知ることができるのか (Was können wir wissen?)」というその根本の問いに取って代わった問いであるかもしれない。(LW 2)

カントの究極で偉大なる問いのカタログについて言えば、「我々は何を知ることができるのか」という問いは、喫緊のものであり続けているわけ

ではない。知ることができるものとして明らかになった事柄に対する失望は、「我々が知ろうと欲していたのは何であったか (Was war es, was wir wissen wollen?)」と問うことを要求する。それは「我々は何を望んでもよいか (Was dürfen wir hoffen?)」という規範に関する別の主要な問いを、「我々が希望してもよいとされていたものとは何であったか (Was war es, was wir erhoffen durften?)」と変容させ、回避不可能なものとする。(LW 8)

これらの言及はカントによって提起された哲学の問いからの距離を表現している。「我々は何を知ることができるのか」という認識の問いや「我々は何を望んでもよいか」という宗教の問いに対する熱情を、現代の我々はもはや共有してはいないとされる。それは同時期の別のテキストでも言及されているように<sup>(9)</sup>、学問一般の真理に対する現代的懐疑ないし失望の表明でもある。それがいまや別種の問いを呼び起こさせる。幻滅の後、それらの探究が何を「期待」していたのか、その期待を導いていたものとは何だったのかと、人は醒めた頭で問い直すのである。

ブルーメンベルクの諸著作に色濃く見られるこのような視点が、ニヒリズムを引き受けつつその「克服」へと向かうのとは別の思考の方向性を開いている。ブルーメンベルクの思想はしばしば「絶対者からの解放」(マルクヴァート<sup>(10)</sup>)や、あるいは「形而上学以後の哲学の可能性」(シュテルガー<sup>(11)</sup>、ラスムセン<sup>(12)</sup>)と特徴づけられる。これらの性格づけはたしかに誤りであるわけではない。とはいえかつての哲学の「乗り越え」や「克服」を宣言し、自身の立場をその先に位置づけるという、それ自体がすでにトボス化した所作をブルーメンベルクが取ることはない。思考を続行させるのではなく、むしろ思想史的に記述されうるかつての諸々の「期待」を手がかりとして、そこか

ら浮きあがるものに目を凝らす。そこではじめて見えてくるものこそ、もともと不可能であるものに期待をかけては失望を繰り返す存在者としての、「人間」のありさまなのである。

ある種の探究に対する興醒めは別の探究を誘導する。すなわち失望によって生じた「空白」は問題関心を再び、かつ別様に駆り立てるのである。ブルーメンベルクの思考が精神史記述というスタイルをとるのも、それ自体が「それによって何を望んでいたのか」という新たな問いのもとで、過去の諸々の期待へと向かい合っていることを示唆していると言えるだろう。この方向転換によって、ブルーメンベルクはかつての形而上学や超越論哲学を、人間の事柄として、すなわち人間学的観点から扱い、意義づける視座を得る。それと同時にこのような思考の転回についてはすでに指摘されているように<sup>(13)</sup>、ドイツ文化哲学の伝統が重要となる。真理への直接的探究の断念を哲学の放棄に結びつけるのではなく、むしろ新たに探求を開始する方法として、人間的形成の世界としての「文化」へと定位したジンメルやカッシーラーとともに、ブルーメンベルクもまた歴史的媒介という「迂回 (Umweg)」を追跡するのである。文化哲学の批判的継承という点は、多岐にわたるブルーメンベルクの論述の狙いを見失わないためにも、無視できないコンテキストである。

#### b. 『マタイ受難曲』のテーマ

本稿は、このようにひとまず要約されうるブルーメンベルクの思考がいかに宗教哲学的問題系と結びつくのか、という点へと考察を進めることにしたい。その際に重要となるのが、とりわけ後期著作『マタイ受難曲』(1988年)である。たしかに博士論文(1947年)<sup>(14)</sup>以来、神学関連の諸問題がブルーメ

ンベルクの思考全体の背景にあることは明白である。しかしキリスト教および宗教の問題が中心的にテーマ化されるのは同著を措いて他にない。そもそも宗教の問題が初期メタファー学の内部でそれとして位置づけられることはなかったのである<sup>(15)</sup>。とすれば『マタイ受難曲』は、初期の修辞学的な議論の限定を越え出ながら、後期特有の「人間学」との結びつきを示す資料のひとつであると言えよう。

では、『マタイ受難曲』の主題とはどのようなものだろうか。Matthäuspasionという書名は、たしかに『新約聖書』「マタイによる福音書」が叙述するキリストの受難物語を示唆するが、1727年に初演されたバッハの《マタイ受難曲》をまずもって指示する言葉でもある。ここから推察することができるように、この本は聖書の純粋な釈義を目的とするものではない。むしろバッハの楽曲を代表とした、宗教に関する「受容 (Rezeption)」の様々な局面がそのテーマなのである。たしかにブルーメンベルクのこの著作でも福音書の受難物語が大きく取り上げられてはいる。しかしながらブルーメンベルクによれば福音書の記述であっても実際のところでは真の「起源」を開示するものではない。すなわち福音書記者マタイの証言は伝え聞きに基づくものであり、彼はキリストの受難を直接的に目撃したわけではないのである (MP 235)。この象徴的なエピソードに導かれつつ、ブルーメンベルクの考察は宗教の「起源」ではなく「受容」に定位したものとなる。

「起源」の資格が仮に認められるテキストも様々な意味を産出する「受容」のプロセスから逃れることはできない。だとしても注意すべきなのは、この議論が宗教的な根源性の不可能性を主張するものではないということである。ブルーメンベルクの力点はむしろ、「起源」を彼方に見失う「受容」のプロセスにおいてこそ、根源性を備えた宗教経験が達成されるという点にある。要

するに『マタイ受難曲』は、「起源」から「受容」への視点転換を通じてその過程において生成し成立する宗教哲学的ないし宗教的な根源性を記述するような、いわば「受容の宗教哲学」を立ち上げる試みだと言えよう<sup>(16)</sup>。

これから見ていく「哲学者の神の過剰 (Die Exzesse des Philosophengotts)」はその最終章にあたる小節である。そこで展開される、神をめぐる概念史記述もまた、「受容の宗教哲学」の一環として、あるいはその締めくくりとしてまずは理解されなければならない。

## 2. 神概念のエスカレーションとその抑制

「神」は西洋哲学史において最も問題的な概念のひとつだと言えるだろう。この概念自体に予想される多層性や「分厚さ」に比して、ブルーメンベルクの叙述は簡素である。この章で問題となるのは、表題に示されている通り、「哲学者の神 (Philosophengott)」とその「過剰」である。「哲学者の神」という主題は「アブラハム、イサク、ヤコブの神」とのパスカルの区別を惹起させる<sup>(17)</sup>。とはいえ、ブルーメンベルクの狙いは神把握の仕方をそのように峻別し分類することでも、あるいはそのどちらかの陣営に肩入れすることでもない。ブルーメンベルクの視線はむしろ、先に見たように、「哲学者の神」に対する諸々の「期待」へと向けられている。そのかぎり、近代宗教哲学の流儀に倣い神の哲学的概念把握の継続的遂行がそこで目指されているわけではない<sup>(18)</sup>。

ブルーメンベルクによる「哲学者の神」の系譜学は、アンセルムスからデカルト、カント、ヘーゲルへと「神の存在論的証明」を軸とする問題史を描く(ヘンリッヒ<sup>(19)</sup>)のではなく、アンセルムスからスピノザを経由して、そ



こからニーチェへと着地するという叙述のラインを引いている。このあまり一般的ではないように思われる接続によってブルーメンベルクは何を狙っているのだろうか。手がかりとなるのは表題に付けられた「過剰 (Exzesse)」、あるいは章の中に頻出する「エスカレーション (Eskalation)」という言葉である。以下、具体的に章の叙述をたどってみよう。まず、哲学者の思索に受容される神は、その威力と偉大さを、それ以上がないものとして肥大化し、他に比肩するものを否定する神だとされる。それに対し、教義学的な三位一体の神は、父と子の愛による結合を語り、神と人との連関を構築することに向かうことで、その肥大化を抑制するものである。このように、ブルーメンベルクは「哲学者の神」がその崇高さ・巨大さを思弁的要請に従って突出させていく様子を、その「過剰」ないし「エスカレーション」と呼ぶのである。

まず大きく取り上げられるのは、アンセルムス『プロスロギオン』第15章<sup>(20)</sup>における神の二種類の規定である。第一に、いわゆる「神存在の存在論的証明」に関わる規定——「それより大きいものは考えられない (quo maius cogitari nequit)」——が挙げられる。最大者という規定には無欠性が含まれる。とすれば現実に存在するという性質もまたそこにあるのでなければならない。そのような概念が思惟される以上、神は現実存在する。

何物も凌駕しえないというこの規定は、先に見たようにまさにブルーメンベルクの考える「哲学者の神」の典型となるものである。しかしブルーメンベルクによれば、アンセルムスにおける神の把握はそれに留まるものではない。第二の規定——「考えられうるすべてのものよりも大きい (quiddam maius quam cogitari possit)」——では、神は思惟可能性を超えていくのである。第一の規定に関わる存在論的証明が、考えるという行為の枠内で神の實在を確保するものであったのに対し、第二の規定ではもはや概念と實在の連関が理解

不可能なものとなっている（MP 298-299）。

過剰化とは、神の理解不能で崇高な性格を強化する方向に思考が駆り立てられていくことである。アンセルムス以後、人間の思考のみならず、世界からも神の独立性が強められていく<sup>(21)</sup>。その結果出現するのは、世界とは全く関係がないにもかかわらず神は「万能」であるがゆえに世界へと介入しようという説明ならざる説明である。この不合理への「ラディカルな対抗手段」が近代の「汎神論」（MP 299）ないし「スピノザ主義」（MP 300）であるとされる<sup>(22)</sup>。汎神論は世界を崇高化し神と重ねることにより、神を理解可能な地平へと引き留める。それが神の「エスカレーションの抑制」だとされるのである。

このように、ブルーメンベルクが叙述する神の概念史は、神の超越と内在の問題をめぐり、それを概念把握可能性からの超脱とその抑制という観点から構想される。神概念は人間と神、世界と神を切り離すことで神の崇高さを担保する方向へとエスカレートするが、そのエスカレーションを抑制する動きも、神の意志を知解可能で概念把握可能なものとするという形で——つまり「無意味なものの禁止」（MP 300）という形で——現れるとされる。

### 3. 神を死者として思い出す——ニーチェによる二重の距離化

この叙述がどのような狙いを持つのかと問う前に、もう少しブルーメンベルクに付き合うことにしたい。神に対する哲学者たちの探究は、神の崇高さ・至高さを思弁的に強化するかたちで進められてきた。その流れにおいてひとつの結末を用意するのが、まさにニーチェが説く「神の死」である<sup>(23)</sup>。

神の「死」とはそもそもどのような事態を表現するものだろうか<sup>(24)</sup>。その

独自の意味合いを考えるうえで、ブルーメンベルクはいくつかの先行する思想をここでニーチェに引き合わせてみせる。まずはプラトンの「想起（アナムネーシス）」説である。『メノン』第二部（80d-86c）において、ソクラテスは召使の少年に、幾何学に関する未知の問題を解かせ、それによって認識が内行的に行われること、およびそれが生前に見た真実在としてのアイデアを「思い出す」ことによってなされることを証明する。ブルーメンベルクはここにニーチェの「神の死」と類似したものが潜在していると注意を払う<sup>(25)</sup>。「想起」という出来事において見られるべきなのは、思い出されるものが現在にはすでに「ない」こと、しかも「ない」というかたちで保持されていることで、ある種の「不変性」が付与されているということだとされる<sup>(26)</sup>。「想起」は現在に空いた穴を埋めるのではなく、むしろ不在を不在として強調し、対象を過去化して表象させることで、その実在を確定的なものとするのである。「失われたものを「想起する」ことではじめて、過ぎ去ったものの完全な「実在性」は到達され、「制作され」、保証される」（MP 301）。

しかもニーチェの場合、思い出しの対象がすでに完了した「死」であることによって、つまり「死者」であることで、不在の性格がプラトン以上に過剰なものとなる。想起された死者としての神は、その死によって世界と人間から切り離されるとともに、死者として想起されることで、その切り離しを二重の仕方ですすめさせる。それによって神は消え去り見失われるのではなく、むしろその実在性の度合いを極限まで高め、神を死者として思い出す人間に対して避けがたく認容し難い「空白」として現れるのだ、とブルーメンベルクは分析するのである。

#### 4. 哲学者の神の死——エスカレートの極致

ブルーメンベルクによればこの二重の切り離しによって獲得された実在性の強度はニーチェ以前に現れることのなかったものである。その特異性を示すために、ブルーメンベルクはキリスト教の教義上での「神の死」を引き合いに出している。人類全体の罪を贖うための十字架上での死こそ、キリスト教の語る「神の死」である<sup>(27)</sup>。つまりキリスト教の信仰体系においてもまた——あるいはここでこそ——神を死者として思い出すことは中心的な位置づけを与えられているのである。

課題は無論、「神の死」という観念自体の同等性によってニーチェとキリスト教を近づけることではなく、むしろ意味内容に関するニーチェ特有の転倒を確認することにある。ここで重要視されるのは「復活」の有無である。教義が語るキリストの「受難」はたしかに「神の死」ではあるが、それは「復活」を必然的に伴う「死」であった。したがってここに脱現在化による精神化が認められるとしても、死復活はニーチェに見られるような二重の距離化ではない。それはむしろ二重の仕方距離を取り戻すことであり、三位一体の神概念を「完成」<sup>(28)</sup>させることなのである。したがって神と人との和解を目指す教義学の作業は、神概念のエスカレーションという視点から見れば、その過剰を抑制し統制する方向に働いていると言えよう<sup>(29)</sup>。

この点にニーチェとの対照が現れる。ニーチェが語る「神の死」は、蘇りとセットになった「宗教者の神の死」ではなく、「贖罪」や「救済」という観念を欠く「哲学者の神の死」であり、人間のために死ぬ神の死ではない<sup>(30)</sup>。ニーチェによって死が確証された神は「哲学者の神」でなければならなかった。ブルーメンベルクによれば、ニーチェの神が「復活」を伴わないのは、

その神によって救済されるのではなく、むしろそれと交代すること、ないしその権限を譲り受けることを彼が目指していたからである。しかも交代される者は、交代されるに値する者でなければならなかった。復活が約束された神では弱かったのである。「きわめてパラドキシカルなことであるが、これは次のように感じられるものである。想起の神、ニヒリズムの神、慰めようもなく自己を欲する主体があてもなく捜しまわることの神は、身内にはすでにあらかじめ無罪判決を保証してくれているはずの審判者を信頼しつつ信じることの神よりも強力なものである」(MP 302)。いまや「哲学者の神」を死者として思い出すことによって、神概念の崇高さは極限まで高められ、それを譲り受ける「超人」の登場を用意するのである。

## 5. 歴史的な真空恐怖——エスカレート背景

とはいえ「哲学者の神が死ぬ」という難解で尋常ならざる観念が形成されるというのは並大抵のことではない。ブルーメンベルクが分析するように、そのためには様々な条件が必須なはずである。まず通常理解では哲学者の神は——キリスト教の神と異なり受肉を前提しない等の理由で——死ねない。それが死んだのだとあえて断言するのだとすれば、そこには宗教者の神——あるいはヘーゲル的な「精神としての神」——からの規定の密かな譲り受けがあるはずである。それは神自身があえて自死を遂行するという理解である。「神は「自己原因」としてただ独力で実在していたのだから、神が死んだのであっても、それは自己自身の力によって死んだのである〔…〕神がさせるのでないなら、誰も神を殺すことはできない」(MP 304)。こうして形成された観念こそまさに、ニーチェが演じた神から超人への権限移譲劇——「ある種の

形而上学的受難劇」<sup>(31)</sup>——のために用意された舞台である。

このように、ブルーメンベルクによれば、ニーチェの神概念はそのエスカレーションと抑制をめぐる二つの歴史的な系譜を織り合わせ、それを前提としたところで成立する。たしかに「自殺する哲学者の神」なる観念は、ニーチェのテキストから直接的に読み取ることのできるものではないだろう。だとしてもとにかく、ブルーメンベルクが問題としているのは、ニーチェの思考の背景となる事柄なのである。とはいえニーチェの意図を逆撫でするように読むことでブルーメンベルクは何を狙っているのだろうか。それについて最後に考えてみたい。

神概念の過剰化と呼ばれた歴史的な概念形成に加えて、まさにそれと対になるような、ニーチェ的思考のもうひとつの背景について、ブルーメンベルクは「Passion」という語の両義性（「受苦（Leiden）」と「情念（Leidenschaft）」）に触れつつ、章の最後の箇所で言及している。

ただ人として、人となることによってのみ、神は受苦を経験することができたに違いない。しかし神をエスカレートさせるよう駆り立てることは——神話と宗教の歴史の全体を踏まえるなら——人間の「情念」のようなものに見える。自らの神を高めることは、人間にとって自らに固有の事柄、人間の事柄を駆り立てることである。（MP 306）

まさにここで、ブルーメンベルクはなぜ「哲学者の神」とその過剰化こそを考察の主題とすべきであるか明確に語っている。問題とされるべきなのは神概念をエスカレートさせるその背景である。「哲学者の神の死」という観念が結実することにより、極限まで高められた概念の崇高さに見合うような、

その権限を譲り受ける者としての「超人」が用意される。そこに認められるのは、ひとつには、人間的なものに対する肥大化した要求であり、自らが神になりかわって自身の生存を確保しようとするような近代的人間の「自己主張」である。それが神の崇高さを過剰化させる。

もうひとつ、ブルーメンベルクはここで、概念形成の過剰化によって生じるような、理解不可能性の「空白」が与えてくる「恐怖」について指摘している。

ニーチェのポイントは、神の終わりを人間——単なるヒト科の動物という来歴を全体的に持つ人間——の終わりに接続し、そこから超人を用意するというオートメーションの構築である。空白は存在しない。歴史的な「真空恐怖」(*der geschichtliche horror vacui*) が非常な力を持っているのである。それこそ、このように神を高めようとする「Passion」に推定されるものではないだろうか。

神を過剰化し、人間を過剰化することで帰結する意味の空白化は、人間が自らに与える恐怖でもある——ニーチェの思考の背後に、あるいはニヒリズムという時代診断の背後に、こうした恐怖を読み取る際の理論的根拠となるのは、本稿の冒頭で触れたブルーメンベルク自身の「人間学」であると思われる。簡潔にまとめるならそれは、真空恐怖のような「情念」を（生物学的ではなく）「歴史的」な次元において——例えば概念の過剰化を実例として——把握する、歴史文化的媒介を本質的な要素とする人間存在論であると言えよう。

いずれにしても、この章句の意図するところを精確に理解するためには、

遺稿『人間の記述』を中心とした諸々のテキストのさらなる検討が必要となる。そこからさらに、たとえば『近代の正統性』第二部「神学的絶対主義と人間の自己主張」の議論を、「空白化」とその「埋め合わせ」のひとつのバリエーションとして捉えることができるなら、そこでようやく我々はブルーメンベルク哲学の全体像への糸口を見出すことができるはずである。「メタファー学」との連絡は明白である。というのも『メタファー学のパラダイム』においてすでに、その主対象である「絶対的メタファー」は「いわば精神的な「真空恐怖」に由来するように思われる」(PM 178)とされていたからである。

#### おわりに その恐怖は歴史的である——強迫のプロセスから距離を取る

概念の形成は意味の空白の埋め合わせとして機能するだけでなく、過剰化により空白を生じさせもする。概念史の過程そのものがもたらしたそのような空白こそ、ニーチェ的な「神の死」の可能性の条件である。『マタイ受難曲』「哲学者の神の過剰」章の結論をあえて定式化するなら、そのようにまとめられるかもしれない。いずれにしてもこの著作は全体として、キリストの「受難・受苦」にまつわる人間の「情念」の変遷・過剰化に関わる。「哲学者の神」という哲学的にも宗教学的にも回避されがちな主題もまた、そうした人間学的視座において場所を持ちうるのである。

ブルーメンベルクにとって常に問題なのは、(例えば「神の死」のような)隠喩や概念に触発されて思考を駆り立てることではなく、むしろそれが持つ切迫さの背景を探ることである。『マタイ受難曲』は次のように閉じられている。



エスカレーションのあらゆる段階に知られることなく漂い、神の探究者を自称したり、神の探索に熱中したりする者たちを休ませることのなく、力尽きるまで駆り立てているのはどのようなエネルギーなのだろうか——古くからある「真空恐怖」は、このように問うことの可能性を剥奪する。(MP 307)

そのように問うためにはまず、問いの可能性を塞ぎ奪っているものについて明らかにする必要がある。言い方を変えれば、我々はなぜニーチェが言うような仕方でも神を死者として思い出さなければならないのか——この問いを問いとして引き受けるためには、ニーチェのように考えること、すなわちニヒリズムの「克服」を時代的課題として引き受けることを、まずはやめなければならない。そこではじめて、その引き受けを強制的に課してくる「歴史的な真空恐怖」を問うための視野が開かれてくるはずである。ニーチェ以後にも「死」について語るよう駆り立てられているものを見出すことは容易である。たとえば人間の死、主体の死、〇〇学の死、〇〇・ターン、西洋近代の超克、ポスト・モダン、ポスト・ポスト・モダンとしての実在論、人工知能(AI)技術の進展を機縁とした「ポスト・ヒューマン」の予言など、きりが無い。哲学を含め学問全体が要求する「新しさ」、「ポスト」の論理の過剰に「歴史的な真空恐怖」の痕跡を見て取ることは難しくない。現在と過去を切り離し、過去を「克服」されたものとして現在の土台として据える。そのように過去と現在を処置し、切斷的連続を打ち立てることによって、我々はいくばくかの安心を得ることができる。しかしその強迫的なプロセスが終わることはないだろう。ブルーメンベルクが求めたのは別の道である。「克服」を引き受けるのではなく、ほとんど必然化した「克服」要求に見切りをつけ

ること。要求のエスカレート（とその抑制）を描くブルーメンベルクの歴史記述は、それを単純に拒絶するのではなく、そこからうまい具合に距離を取るための所作として理解することもできよう<sup>(32)</sup>。

## 註

- (1) 「特集 その続きを生きている——死者との関りの諸相」『宗教哲学研究』、No. 36、宗教哲学会編、昭和堂、2019年。佐藤啓介『死者と苦しみの宗教哲学：宗教哲学の現代的可能性』、晃洋書房、2017年。
- (2) 分析哲学系ニーチェ解釈で知られるレジンスターは多様な解釈を誘発しかねないニーチェの「神の死」について次のように主張する。「私が提起したいのは、神は死んだと宣言することでニーチェが主張しているのは、神信仰が信用できなくなつた、ということである」（バーナード・レジンスター『生の肯定：ニーチェによるニヒリズムの克服』岡村俊史・竹内綱史・新名隆志訳、法政大学出版局、2020年、p. 67）。
- (3) イェーナ期の論文「信仰と知」（1802年）、あるいはベルリン期の宗教哲学講義におけるキリスト教論を参照。
- (4) ブルーメンベルクの著作からの引用に関しては以下の版を用いる。引用箇所を「 」で指示し、その後で（ ）内に略号と頁数を表記する。  
AM Arbeit am Mythos (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 2006).  
MP Matthäuspasion (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1988).  
LW Lesbarkeit der Welt. 9. Aufl. (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 2014)  
PM Paradigmen zu einer Metaphorologie. Mit Kommentar von Anselm Haverkamp unter Mitarbeit von Dirk Mende und Mariele Nientied (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 2013).  
SZ Schiffbruch mit Zuschauer. Paradigm einer Daseinsmetapher (Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1979).
- (5) W Wirklichkeiten in denen wir leben (Stuttgart, Reclam, 1981).
- (5) 拙論「哲学的言語の克服されざる根本要素としてのメタファー——ブルーメンベルク「メタファー学のテーゼ」講演について」、成城大学大学院ヨーロッパ文化専攻編『ヨーロッパ文化研究』第42号、2023年、73-100頁参照。
- (6) とりわけ『鑑賞者のいる難破船』（1979年）最終章「非概念性の理論への展望」

(SZ 87-106) と、遺稿『非概念性の理論』(2007年)を参照。「メタファー学」から「非概念性の理論」への展開については拙論「背景化する隠喩と隠喩使用の背景——ブルーメンベルクをめぐるひとつの哲学的問題系」、京都哲学会編『哲學研究』第606号、2021年、25-64頁。

- (7) 先駆的な研究業績である Oliver Müller, *Sorge um die Vernunft: Hans Blumenbergs phänomenologische Anthropologie* (Paderborn 2005)、およびブルーメンベルクの「現象学的人間学」を知るための第一の資料である遺稿『人間の記述 (*Beschreibung des Menschen*)』(2006年)を参照。
- (8) 生誕100年にあたる2020年、いくつかの伝記研究が相次いで出版されている。非常に詳細な情報を集めている Rüdiger Zill, *Der absolute Leser: Hans Blumenberg. Eine intellektuelle Biographie* (Suhrkamp, 2020) はその中でも重要である。
- (9) 1979年『鑑賞者のいる難破船』「非概念性の理論への展望」では次のように述べられている。この箇所で注目すべきなのは、この断念ないし失望がメタファー学の新たな位置づけと連動している点である。「我々が学問に対して真理なるものを期待することができないということをもう認めなければならないとしても、いまや知ることの失望に結びついているものをなぜ我々が知ろうと欲したのか、我々は少なくともそれを知ろうと欲するのである。この意味で諸々のメタファーは、理論的好奇心を裁定している沈殿層について推定するための示準化石 (*Leitfossilien einer archaischen Schicht des Prozesses der theoretischen Neugierde*) である。この層が深く沈殿するものだと言っても、それをアナクロニスティックなものであると見なす必要はない。理論的好奇心の刺激や真理への期待の充実へと戻る道はそもそも何もないのだから」(SZ 87)。
- (10) Odo Marquard, *Entlastung vom Absoluten*, in: Wetz & Timm (Hg.), *Die Kunst des Überlebens: Nachdenken über Hans Blumenberg* (Suhrkamp 1999), S. 20.
- (11) シュテルガーはブルーメンベルク『メタファー学のパラダイム』を締めくくる最後の一節「形而上学の消失はメタファー使用を再びその位置に呼び戻す」(PM 189) を引き、ブルーメンベルクのメタファー学の特徴を「形而上学以後」ならびに「自我論以後」の哲学の可能性」(Philipp Stoellger, *Metapher und Lebenswelt: Hans Blumenbergs Metaphorologie als Lebenswelthermeneutik und ihr religionsphänomenologischer Horizont* (Mohr Siebeck 2000), S. 225) と定めている。
- (12) ラスムセンはこの「形而上学以後の (after-metaphysical)」という言葉を使用する際にその after が持つべき二つの意味を利用している。つまり「以後」であること

は（ドイツ語の nach という接頭辞に従い）「～について」をも示しているのであり、そのような nach-denken の二重構造（距離を取りつつ付き従う）こそブルーメンベルクの思考態度を根本から示すものであるとする。「それ〔ブルーメンベルクの隠喩学〕は、それが背景に回りこむ nachdenken によって特徴づけられているという意味で、after-metaphysical である。その nachdenken は形而上学の変性と同時に不可避性を認識する」（Ulrik Houliind Rasmussen, *The Memory of God: Hans Blumenberg's Philosophy of Religion*, University of Copenhagen 2009, p. 63）。ところでこのような nachdenken としての思考のあり方には、ラスムセンも着目するようにヘーゲルとの共通性が指摘されよう。ヘーゲルの nachdenken については拙著『宗教史の哲学——後期ヘーゲルの迂回路』、京都大学学術出版会、2019年、とりわけその第一部第一章参照。

- (13) カッシーラー研究者として著名なレキや独自の「文化哲学」を展開するコナースマンによるブルーメンベルク解釈を参照。Birgit Recki, *Der praktische Sinn der Metapher. Eine systematische Überlegung mit Blick auf Ernst Cassirer*, in: Wetz & Timm, *a.a.O.*, S. 142-163. Ralf Konersmann, *Vernunftarbeit. Metaphorologie als Quelle der historischen Semantik*. In: *Ebenda*, S. 121-141. Ders., *Zuletzt und verspätet. Hans Blumenbergs Beschreibung des Menschen als Kulturphilosophie*, in: Michael Moxter (Hg.), *Erinnerung an das Humane* (Mohr Siebeck 2011), S. 226-239.
- (14) Hans Blumenberg, *Beiträge zum Problem der Ursprünglichkeit der mittelalterlich-scholastischen Ontologie* (Suhrkamp 2020).
- (15) 近接する主題領域である「神話」の考察が、『メタファー学のパラダイム』（1960年）ではメタファー学に固有の課題として明確に位置づけられ、後に『神話への取り組み』（1979年）として結実するのと対照的である。
- (16) ブルーメンベルク『マタイ受難曲』を「受容の宗教哲学」として定式化し、隠喩学のプロジェクトに引き戻しその哲学的性格を考察するものとして、拙論「ブルーメンベルクにおける宗教受容の哲学——『マタイ受難曲』を中心に」、日本宗教学会編『宗教研究』399号、2020年、1-23頁を参照。
- (17) 『マタイ受難曲』の本論ではむしろ「アブラハム、イサク、ヤコブの神」の問題に光が当てられていたと言えるかもしれない。「十字架上で死ぬ者を「哲学者の神」の基準で測る必要はない。「必要はない」というのは弱すぎて、言い逃れとしては胡散臭すぎる。むしろ、それはまったくもってできないと言ったほうがよい。それは次のような世界で最も単純な理由からそうなのである。つまり我々は、この

神に適した聖書の名前——「人の子」、「神の僕」、あるいはとくにそれがかつてその場合に用いられていたはずなら、「メシア」という名前——が何を意味するか、知らないのだから」(MP 110)。この引用にも、本稿の前節で示した「受容」の観点が——「起源」へと回帰しようとする批判的文献学や聖書釈義の限界を示唆するという仕方でも——際立っている。

- (18) それゆえブルーメンベルクの「哲学者の神」論は、その「解体的受けとり直し」および「〈神の死〉以降の神」論のひとつのバリエーションとして読むことも可能であろう。「哲学者の神」論を現代宗教哲学の課題から逆照射し、その課題に対する手がかりを探る試みとして、杉村靖彦「哲学者の神」、『岩波講座宗教4 根源へ——思索の冒険』、岩波書店、2004年、133-159頁とりわけ136頁以下を参照。
- (19) Dieter Henrich, *Der ontologische Gottesbeweis: sein Problem und seine Geschichte in der Neuzeit* (Mohr Siebeck 1960)。
- (20) 「それゆえ主よ、汝はそれより大きいものは考えられないだけではなく、考えられるすべてのものより大きいのです (Ergo domine, non solum es quo maius cogitari nequit, sed es quiddam maius quam cogitari possit.)」。
- (21) アンセルムスの第二の規定は後の時代に「神秘主義」として結実する思想の先駆であるが、ブルーメンベルクはむしろこの箇所では、中世における、コスモスの世界の外に佇む不動の動者としてのアリストテレスの神概念の支配に着目している。そこでは人間の思考のみならず、世界からも神が切り離されていく。ブルーメンベルクによれば、とりわけ13世紀ではそうした独立した神が世界へと介入しうる根拠として、「万能」の概念が抽象的に過剰化していくという。
- (22) 「解明されざる自由を持つという点から神を「隠れたる神 (deus absconditus)」とすれば、概念把握不可能なものを過度にエスカレートさせてしまう。近代の(公に宣言された、あるいは隠された)スピノザ主義は、そうした過剰を抑えるための技巧であると考えられるのである〔…〕スピノザの「神即自然」はこの過剰から引き離されている」(MP 299-300)。
- (23) 「リスボン大地震によって弁神論が挫折し、スピノザ主義が隠された「成功」をおさめた後で、神がさらにエスカレートするということはあるのだろうか。この問いに対して私は次の一文に凝縮して答えたい。神観念の崇高さは、もはや確定された神の死において、悼み哀しまれることなどなく、克服されてもいない神の死において初めて示されたのだ、と」(MP 301)。
- (24) 死せる神は「隠れたる神 (deus absconditus)」とは異なる。「隠れ」は、たしかに

神が「超越からも内在からも消え去ったこと」を示すが、それはむしろ残された「アウラ」によって神の栄光を示唆するものである。神の死はまた、神存在の単純素朴な否認——ブルーメンベルクはそれを「神なんてどこにもいなかったですよ、と報告する宇宙飛行士の無神論」と呼んでいる——でもない。「通俗的な無神論——神なんてどこにもいなかったですよ、と報告する宇宙飛行士の無神論——が、詩編作者がすでに言っているように、「神は存在しない」という命題に集約され、それとともに、その反対を主張することはずっと以前から誤解ないし誤解を招くことであり、しかも有害ですらあったと言うのに対し、ニーチェはまさにこの言明を拒んでいる」(MP 302)。

- (25) 「想起 (アナムネーシス)」によって獲得されたものが実際にイデア界の記憶であるかどうか、ということは問題にならない。召使の少年の例であっても、彼が幾何学図形を前に「思い出す」ものは、現象界での自身の過去において実際に経験された事柄では少なくともないのである。
- (26) 「想起されたものはイデアのように不変のものではない。しかしその最終的な「変化」がそれを不変のものとなす。それはヨーロッパの形而上学がずっと望んでいた質を獲得する。取り戻すことのできないものとして、それは不変となる」(MP 302)。
- (27) さらに受難の「アナムネーシス」は聖餐の秘蹟として制度化され、「象徴形式」となる。「神の死という思想によって、哲学者の神は神学の語る歴史の神へといわば接近していく。神学の神はその「アナムネーシス」そのものを「制定」し、儀礼化した」(MP 302)。
- (28) この点を哲学的に明確化・定式化したのは、ブルーメンベルクは触れていないが、ヘーゲルだろう。ヘーゲルにとって、「存在」から「本質」への移行は Sein から Gewesen への過ぎ去りに伴う脱感性化・精神化（「想起・内面化 (Er-innerung)」)として理解されるが（『大論理学』『本質論』）、それは宗教論においては「精神としての神」というキリスト教的神概念——自己外化と死復活（受肉・受難・贖罪）による神の還帰——として表象されるような、「概念」としての精神のあり方の前提を形成するものである。この運動において神概念は人との円環的關係を形成する。それによりエスカレーションを利用しながら抑え込むことに成功する。
- (29) 奇妙な結論であるが、三位一体論、スピノザ、ヘーゲルの三者は神概念の過剰化の抑制という点で機能的に一致するものである、ということになる。
- (30) 「哲学者の神もまた死にうろのかもしれない——これこそ、ニーチェの頭の中で行

われているのだと思われる、それまで想像すらされることのなかった「埋め合わせ」であった。それは超人、すなわちこの過剰さを志願する者による神の受難劇である。ただ、この死せる神は人間のために犠牲にされたのではなく、ニーチェがそうしなければならなかったように、むしろ人間によって、人間の未来とその未来が永遠に回帰するために屠られたと言うべきかもしれない。そこから、神を想起することが人間の自己強化を確実なものとするこへとつながる」(MP 302-303)。

- (31) 「事実についてはいかなる理由もない神が、それについての権利から身を引く神となる。そこで神のエスカレーションは最高潮に達する。神は存在に対する当然の権利と同一であろうとする。神はある種の形而上学的受難劇において (in einer Art metaphysischer Passion)、自己原因性の力によりそこから立ち昇ることのできた深淵へと自らの精神を送り返すことで、自己を放棄する」(MP 305)。
- (32) 断念と方向転換を促す空白化のあり方はさまざまでありうるだろう。いずれにしても 1974 年にクーノ・フィッシャー賞を受賞した際の記念講演で、ブルーメンベルクはカッシーラーの新カント派的な志向に触れて次のように述べている。「[カテゴリーの理想を象徴形式の体系へと移し入れるという] この絶望的な課題の断念がどの程度のものかを回顧的に確定することは簡単なことですが [...] それよりも重要なのは、とくに失敗したわけでもないのにその課題が拘束力を弱めていく理由から目をそらさないことなのです」(W 167)。挫折からの方向転換という一方向的で、ある意味で弁証法的なロジックに考察を落とし込まないこともブルーメンベルクの特徴である。

